本実践・研究から見えてくること

研究協力者　長瀬　達也
（秋田大学大学院教育学研究科）

－６年〇組図画工作科・進藤実践「墨から生まれる世界（絵）」－
教師の誰もが取り組める実践的，具体的な指導方法の確立へ（「教師」への視点）

１．教師の誰もが‥

筆者はこれまで，「図画工作科では他教科と同じように，どの学校，どの学級であっても，子供たちの資質・能力が，教師の指導によって伸長されなければならない」という発言を重ねてきた。この延長で進藤実践について述べるが，特に「教師」への視点から進藤実践に迫りたい。

言うまでもないことだが，教師の誰もが他教科と同じように，図画工作科の授業で子供一人一人の資質・能力を伸ばしたいと願っている。資質や能力をのびのびと発揮して，表現や鑑賞に取り組む姿を目にしたいと思っているはずである。しかし，現実においては，表現や鑑賞の指導で苦慮している教師が多いと筆者は考えている。要因としては，教師自身に表現や鑑賞に対しての自信不足や苦手意識が過度にあることだと筆者は考えている。

２．表現や鑑賞の資質や能力について

教師の自信不足や，そして苦手意識についてであるが，まず筆者は造形の表現や鑑賞の資質や能力などの内容や定義などについて，詳細に，あるいは断定的に述べるべきでないと考えている。造形の表現や鑑賞の姿は実に多様であり，何が資質や能力なのかという論議には終わりがない。

何よりも，人間が人間として五感を働かせ，材料や用具を活用し，道ばたの草木や果てしなく広がる星空までも見つめてきた，とてつもなく長い歴史の重なりを俯瞰すれば，表現や鑑賞に含まれる多様な力の一端は誰でももっている，ととらえることが大切だと筆者は考えている。その証左や根拠は，美術館だけでなく博物館，美術書だけでなく歴史書などにも満ちている。この根本的で，内在する力を発揮せずに，あるいは理解できずに，過度の自信不足や苦手意識を抱えている教師が，想像以上に存在すると考えている。

３．時数の少なさの問題

問題は，私たちの現状において，図画工作科や中学校美術科の年間授業時数が減少してきていることである。小学校高学年は50時間で図画工作科がないなどの週が存在，中学校２年生及び３年生は各35時間，高校での芸術科目は一年間の選択のみが必修である。そして，これらの状況の変化，つまり時数増は今までの流れからは考えにくい。

これでは例えば，テーマを創造的に追究したり，生じた困難を克服したりする過程の時間は明らかに不足する。これらの過程では「試行錯誤」が重要であることが，本校図画工作科の研究でも確認されているが，その時間の確保や保証は簡単ではない。材料や道具に習熟して表し方を工夫したり，過去から現代まで人間が生み出してきた造形物を実見したりして，種々多様で複層的に絡み合う「造形言語」を身に付け，活用する時間は十分ではないのである。苦手意識や自信不足が必然的に生まれやすく，自己の根本に内在する造形の力を発露しにくい構造がある。

大学で筆者が担当する，小学校免許取得にかかわる図画工作科関連科目でも，受講学生の全員が苦手意識や自信不足を克服し，指導に自信がもてるまでの時間数とはなっていない。この点について，筆者は大学教員として常に悩んできたし，残念ながら改善策は見えない。

４．教師自身の言語能力の活用

このような状況が現実には存在すると筆者は考えているが，わくわくした気持ちで図画工作科の時間を待っている子供たちを前にしたとき，けっして教師には萎縮してほしくない。確かに，音楽科や体育科の授業において格段に教師より演奏や運動の能力が高い子供が存在するように，図画工作科でも表現の能力が高くて，助言や指示などに躊躇してしまうような子供の存在を感じる教師は決して少なくないだろう。また，表し方を工夫することに難儀している子供への指導に，見通しがもてず，困惑する場合もあるだろう。

しかし，この状況でも教師には萎縮せず，前向きでいてほしい。そのためには，教師が自身の言語能力を活用してほしい。教員として採用される方は，高校受験，大学受験，教員採用試験などにおいて，言語能力を駆使して思考，表現を行ってきたことで選抜されてきている。子供と比較すれば，格段に高い能力をもっている。この高い言語能力をツールとして活用して指導することを重視すれば，苦手意識や自信不足に振り回されることはない。進藤先生がよき実例である

５．進藤実践での自身の言語を活用する教師の姿

進藤先生は「仮の題名を付ける活動」で「表現方法の選択」に，「筋目模様」を視点とした伊藤若冲などの鑑賞で「自分の学びの省察」に，子供たちを導いている。実践的に有効な指導であるが，基盤は進藤先生が自身の言語を活用していることにあり，心に届く言葉を重ねている。

子供一人一人の表現や鑑賞の履歴を俯瞰，把握し，題材の目標や評価規準を欲張らずに設定して，子供の表現を見つめている。授業に集中して，発問，説明，指示，助言，共感，称賛などを丁寧に全ての子供に発している。これは図画工作科専科のときだけでなく，学級担任のときでも同様の姿であった。高度な表現を見せつけての指導に頼っておらず，ヒントコーナーの参考作品は子供の心情に沿っている。この姿を思い浮かべて，本リーフレットを御覧いただきたい。